

■松村の設計した既存校舎（中校舎と東校舎）の改修

内外装すべてに関し、原設計図や現況調査等に基づいて竣工後の様子を推察し、材料、形状、色彩等を可能な限り当初の状態に戻すことを原則とした。構造計画は、建物の文化的価値を損なわないよう既存の耐震要素を補強することを原則とし、新規の補強を要する場合は、追加した部材が臍別でき、しかも違和感のない意匠となるよう工夫した。

□中校舎

現状では職員室から運動場への見通しが悪く、安全管理上の問題が指摘された。そこで、職員室の廊下側壁面を改修して視線の抜けを確保するとともに、運動場側の玄関、小部屋、廊下を一体化してラウンジとし、運動場への視界を確保した。ただし職員室の既存壁面の木軸は保存し、その間の柵や建具を撤去してオープンなガラス引き戸に変更した。

普通教室は、新西校舎に4教室、残りの2教室は中校舎に確保した。そこで、2階の音楽室とパソコン教室まわりを改修し、2つの普通教室とした。パソコン教室は当初の普通教室の意匠に戻した。音楽室には間仕切りを新設し、新西校舎への廊下を生み出した。



□東校舎

東校舎の6つの普通教室は、特別教室（理科室、家庭科室、図工室、音楽準備室、音楽室、多目的室）に転用することとした。各教室の内装は当初の状態に戻し、その中に必要な什器備品を置くことによって既存部への改変を最小限に抑えた。松村は図書室と旧補導室に特別な意匠を凝らしていた。その内容を、原設計図、竣工時の写真、現場における細部調査などを詳細に検討することによって確定し再現した。図書室においては、鉄筋フレームによる書棚、銀紙貼りの天井、障子、手斧がけの梁、1本だけ白木のままの柱などであり、それらによって、和洋を混在させた興味深い意匠が甦った。旧補導室においては、緋と金紙による千鳥模様、銀紙貼りの天井、白いペンキ塗りの錠戸などであり、子どもたちに対する松村の暖かな眼差しが読み取りが可能になった。



■新西校舎

新たに建設する新西校舎は、小規模化した日土小学校の現状を考慮し、多目的コーナーを2つの教室が共有するオープンタイプとした。そして、建築的性能や熱・光・音環境の向上、安全性やバリアフリーの確保、水周りの充実、そして教師と子どもたちとの親密な関係性を生む空間づくりのために、子どもの視点に立った細部のデザイン手法は中・東校舎から継承した。構造形式は、地元産の杉集成材による耐力壁構造とした。風車状に配した中央の壁柱により水平剛性を確保し、2階は断面欠損を避けた2段格子梁とした。これにより、既存部以上に開放的な空間が実現した。

外観デザインは、その特徴である水平性や川との関係をバルコニーや庇のデザインや平面計画などに反映し、逆に、屋根や開口部のデザインは既存部とは違えることで、連続性と対比を表現した。



■日土小学校のハイブリッドな構造を尊重した構造補強

日土小学校中校舎（1956年）と木造校舎の構造設計標準を比較してみると、洋小屋、教室部の方杖十添え柱、水平トラス筋交い、教室間仕切部への筋交いの設置、柱頭接合金物など、規格とほぼ同様の詳細となっている。

異なるのは、2階床長手方向で教室中央に用いられている型钢を組み合わせた鉄骨のトラス梁、長手方向外壁の鉄筋ブレース（16φ）である。こうした鋼材を使用したハイブリッドな構造形式は、木造モダニズムのなかには多く見受けられるが、伝統木造などの大工技術の延長線には生まれてこない構造要素である。

一方、東校舎（1958年）ではこうした要素がさらに増してくる。わずか2年の差であるが、建築的表現は構造要素も含めて大きく変わっている。鉄筋による水平ブレースの使用、構造部材である木材の耐久性向上の工夫として柱脚木口の保護と水対策のための柱脚金物の使用、柱を外部に露出させたカーテンウォール形式の外壁の採用、鋼製床東など、現在では当たり前のように用いられている建築的ディテールや構法であるが、当時としては画期的なものであり、なおかつ、こうしたディテールが丁寧に適用されている。

改修前の耐震性能は、当時の最先端の技術を盛り込んだと思われる日土小学校でも、現行の耐震診断基準に照らし合わせてみると、耐震診断評点は「一応倒壊しない」の判定の1.0を満足せず、0.7未満の「倒壊の可能性が高い」の判定であった。

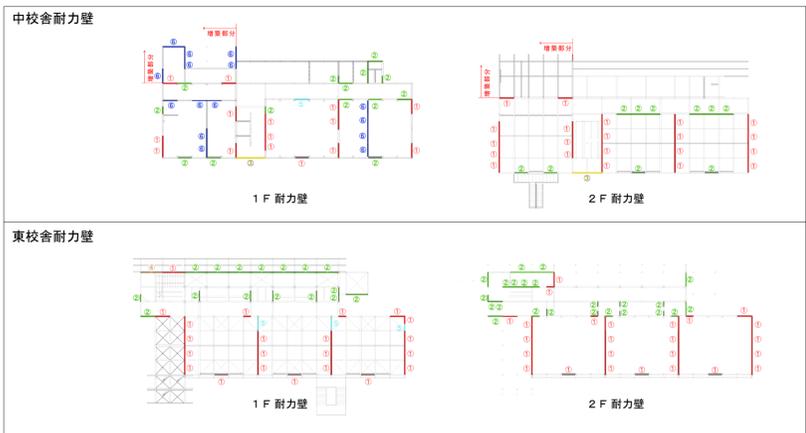
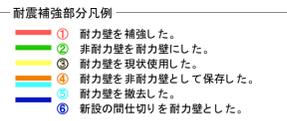
構造補強は、建物の重量、階高による耐震壁性能・接合部低減係数の補正、教室の大空間のため水平平面剛性の確保に注意しておこない、いずれも既存の意匠を損なわないよう、基本的には既存壁面等の中に納めるよう留意した。とくに東校舎川側カーテンウォール部分の鉄筋ブレースは、箇所数を増やすのではなく前後2連とすることで当初の繊細な構成を維持することに成功した。

構造補強方針で耐震補強を行った結果、重要度係数1.25を考慮して耐震診断評点は、1.0以上となり、「地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い」との判定となった。



工事前の丸鋼ブレース円環

改修後の丸鋼ブレース円環



■保存再生活動の経緯

日土小学校の保存再生活動は、建築関係者、市民、行政等多くの人々や組織を巻き込み展開されたが、われわれは常にその中心において目標の達成に向けた懸命な努力を続けた。その活動経緯の概要は以下の通りである。

1999年、日土小学校の保存再生活動は本格的にスタートした。その原点は、日本建築学会四国支部50周年記念事業の一環として1999年7月に開催されたフォーラム「子どもと学校建築」である。松村の設計した八幡浜市立江戸小学校に、建築の専門家や松村建築ゆかりの人々が集まりシンポジウムを開催した。またこの年、日土小学校はドコモ20選のひとつに選ばれ、その価値を地元が再認識することになった。

2003年度には、日土小学校の保存活動を進めるために、日本建築学会四国支部に「学校建築探検隊特別委員会」が設置され、愛媛県内の建築関係者が参加した。地元にも市民による保存グループ「木霊の学校日土会」が誕生した。11月には、木の建築フォーラムと日本建築学会四国支部等の共催による「よみがえれ！木霊の学校 日土ミニシンポジウム」が日土小学校体育館で開かれ、行政関係者や市民等の参加も得て、保存を推進する方向での議論がなされた。

2004年8月、そうしたいわば明るい状況の中、日土小学校で学生らが建築を学ぶ「夏の建築学校 日土小」を日本建築学会四国支部が初めて開催した。ところが9月の台風で校舎の一部が破損したことなどを機に、建て替えを求めたPTA関係者らの意見が浮上し、行政側も慎重な姿勢をとるようになった。

2005年には、そのような状況に危機感を覚えた多くの専門機関（日本建築学会、ドコモ・ジャパン、日本建築家協会等）から日土小学校の保存要望書が八幡浜市に提出された。また2005年度には、「学校建築探検隊特別委員会」と並行して日本建築学会メンバー以外も含む「日土小学校を考えるネットワーク」を作り体制を強化した。8月には2回目の「夏の建築学校」を、松村が設計した八幡浜市津川公民館で開催した。

建て替え希望の声はさらに強まり、2005年9月、八幡浜市は、地元関係者等で構成する「八幡浜市立日土小学校再生計画検討委員会」を発足させ、今後の基本方針の策定を委ねた。

そうした状況を打破すべく、2005年12月、鈴木博之、吉村彰、腰原幹雄という建築史、建築計画、木構造の専門家を招き、シンポジウム「八幡浜の文化資産を考える 日土小学校の再生を目指して」を八幡浜市で日本建築学会四国支部が開催した。また保存再生の具体案の作成を進め、このシンポジウムおよび再生計画検討委員会が発表された。

2006年3月、さまざまな議論の末、上記の提案に沿う形、すなわち東校舎は当初の姿に戻し特別教室として使い、中校舎は職員室まわりを中心に若干の改修をし、さらに小規模な普通教室棟（新西校舎）を増築するという案で再生計画検討委員会の報告書がまとまり、日土小学校の建て替えは回避されたのである。

2006年8月、八幡浜市からの委託を受け日本建築学会四国支部に設けられた「日土小学校保存再生特別委員会」が日土小学校の現況調査をおこない小冊子をまとめ、2007年3月、現況調査報告書を提出した。また、重要文化財指定も射程に入れた改修とするために文化庁との協議を開始し、その指導内容も反映した保存再生計画を立案した。

その内容に沿った実施設計は和田耕一の事務所が落札した。そのうち新西校舎の設計のまとめは武智和臣、全体の構造設計は腰原幹雄が担当した。

2008年9月、改修工事は着工し、工事関係者の努力とわれわれの監修のもと、2009年6月末に無事完了した。



■使い続ける日土小学校

2009年9月、甦った日土小学校へ子どもたちの歓声が戻ってきた。彼らは、3つの異なる時間性を帯びた豊かな空間の中で日々過ごしている。すなわち、当初の姿に復元された空間、そこに新たな改修の手が加わった空間、そして全く新しく作られた空間である。おそらくその経験は、文化や歴史を継承していくことの大切さを教え、ひいては自分が生まれ育った場所に対する優しい眼差しを育むだろう。また、日土小学校をひとつの核として営まれてきた地域活動も、改修後はいっそうの活性化が期待されている。甦った日土小学校は、一種のコミュニティーセンターとしての役割も果たすに違いない。

日土小学校の保存再生は、貴重な職後の木造モダニズム建築の持続的な活用を達成した最初の仕事といえる。またそのことを通じて地域の歴史や文化も継承され本来の意味で豊かな生活空間が形成できるという事実を示すとともに、そのような価値観の重要性を主張したものである。



東校舎図書室。承らなかに満たした読書空間である。



東校舎2階廊下。あらゆる場所が子どもたちの居場所になる。



新西校舎川側のテラスに集う子どもたち